Keywords | スケートパークの由緒、自由度の高い施設

スケートパークの成り立ちと施設特性を踏まえた今後の展望（その１）

大西 太和
都市計画部
都市環境グループ 係長
taiwa.onishi@shinnihon-cst.co.jp

西田　宏
都市計画部
都市環境グループ グループマネージャー
技術士 建設部門（都市及び地方計画）
nishida@shinnihon-cst.co.jp

1 はじめに

スケートパークは、主にスケートボードをはじめとし、インラインスケートや、BMX（自転車競技）など、滑走・走行を楽しむための専用施設である。

スケートボードにおいては、2021年に開催された東京2020オリンピック競技大会から正式種目として採用され、日本人が多くのメダルを獲得したことによって、子供や若年層を中心に人気が一層高まったスポーツの一つである。

一方、スケートボードは、文化（カルチャー）とスポーツという二つの要素を持っており、争うことではなく自己表現、規律ではなく自由の志向を重んじることが特徴であり、多様化する現代の遊び方を象徴するものと言える。

本稿では、多様化が求められているスケートパークについて、その成り立ちや昨今の施設特性を踏まえ、施設設計の今後の展望を考察する。

2 スケートパークの成り立ち

（1）スケートパークの由緒

スケートボードにはいくつかの競技が存在し、その競技ごとに施設の形状が異なっている。東京2020オリンピック競技大会では、2種目が採用されており、一つは街中の階段や手摺、スロープを模した施設の「ストリートスタイル」、もう一方はお椀のプールのように曲面状に施された施設の「パークスタイル」となっている。それぞれに競技の由来があるが、スケートボードの歴史においては、「パークスタイル」が先行して普及した。

スケートボードは、1960年代にアメリカ・カリフォルニア州で普及したとされ、1970年代に、より楽しい遊び方を模索した人々が、住宅用のプールで滑走し始めたことが現代の「パークスタイル」と呼ばれる基となる。

当時のカリフォルニア州では、箱型の一般的なプールではなく曲線を多用した通称「キドニー型プール」（Kidney:腎臓）（写真-1）が流行しており、多くの住宅で取入れられていた。※1その曲線形状が、スケートボードの滑走に適しており、プールの中を流れるように滑走して楽しんでいたとされる。

写真-1　キドニー型プール※2

（2）スケートパーク建設のはじまり

スケートパークの歴史は、今日より50年以内に誕生した短いものである。

前述した住宅用プールで滑走をすることは、他施設を利用した遊びであり、スケートボード専用施設として初めて整備された施設は、1976年カリフォルニア州サンタクルーズ郡で整備されたDerby　Skatepark（写真-2）とされている。施設は、斜面地を利用してサーフィンの波に見立てた曲面や、湾曲したプール形状をコンクリートによって表現した施設となっており、2020年東京オリンピックの種目としては「パークスタイル」に分類される施設である。

一方で、同じく種目となった「ストリートスタイル」を主とした施設が誕生するのは1990年代以降とされており、これらも専用施設ではない場所や構造物（公共の都市部にある階段や手摺、ベンチなど）を利用して楽しんでいたことが起源となっている。

写真-2　Derby Skatepark

3 自由度の高い施設

スケートパークは、本来泳ぐことを目的としたプールや市街地などの公共空間、また、そこに整備された階段や

手すり、座るためのベンチなどがデザインの由来である。それら公共施設は重要なランドスケープデザインとして設計されることから、スケートパークにおいても同列に扱うことが必要とされ、ただ滑走ができることに止まらず、洗練された空間形成であることが施設の評価となる。

それらの特性から、今日においても施設の詳細規則は定められておらず、施設ごとに形状や規模が異なる自由度の高い施設となっており、それらがむしろ魅力となっている。

4 当社の実績

現在、スケートボードはオリンピック競技大会の正式種目として採用されるなど、新しいスポーツ競技として発展し、広く普及され始めている。

当社には、東京2020オリンピック競技大会の正式会場である「有明アーバンスポーツパーク」や、富山市の「NIXSスポーツアカデミー」、その他複数の大型スケートパークの設計実績がある。

「有明アーバンスポーツパーク」(写真-3、4)は、専用競技施設として最大規模を誇り、セクション(技をするための構造物)は複雑でありながら、すべての選手が平等に採点を受けられるよう、シンメトリーに近い配置構成をしている。さらに、セクションに使用する鋼材やコンクリート配合設計は、これまでの仕様を見直し、より高強度な仕様が採用され、高度化し続ける選手の技を引き出すための配慮がされている。

また、殆どの人が映像配信によって競技を観戦することから、施設内に映像カメラ用ボックスを配置し、より臨場感のある配信をすることで、競技の魅力を伝える工夫が施されている。

写真-3　有明アーバンスポーツパーク(ストリートスタイル)

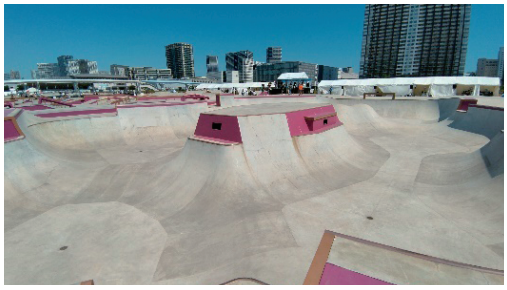

写真-4　有明アーバンスポーツパーク(パークスタイル)

富山市の「NIXSスポーツアカデミー」(写真-5)は2014年に竣工しており、富山市出身の中山楓奈選手(当社スポンサー契約)は当施設で練習を重ね、オリンピック競技大会等で目覚ましい活躍をしている。

施設は、競技種目の「ストリート」と「パーク」どちらも兼ね備えた施設となり、初級者から段階を経て練習ができる配置構成が設計されている。また、滑走動線を植樹帯で分散することで利用者が安心安全に利用できるよう配慮されることや施設に緑感を加えたレクリエーション性の高い施設となっている。

いずれの施設においても、他施設と同じ形状や配置構成は無く、施設特性がそれぞれで異なっており、当社ではニーズを捉えた自由度の高いスケートパーク施設の設計を行っている。

写真-5　NIXSスポーツアカデミー

5 今後の展望

昨今の競技における日本人選手の活躍は目覚ましく、スケートパークがスポーツ施設として広く認知され始めており、競技は大きな過渡期を迎えている。さらに、2024年パリオリンピック、2028年ロサンゼルスオリンピックまで正式種目として内定していることから、継続して人気が高まると期待する。

また、自由の志向性が高いという競技特性は多様化する現代スポーツとして、子供や若年層に広く支持されており、新しいスポーツ施設としてより需要が高まると考える。

当社では、ランドスケープとの親和性を重要と捉えながら、今後高まる施設需要に対して、それぞれのニーズに応じた自由度の高い施設設計を行い、建設コンサルタントとして技術的に応えたい。なお、現在複数のスケートパーク設計が進行中であるため、これらの実績を踏まえて次号以降に当社の新たな取組みを詳報したい。

参考文献

※1 カリフォルニア・デザイン1930-1965　モダン・リヴィングの起源／ロサンゼルス・カウンティ美術館、国立新美術館、新建築社【編】
※2 The Cultural Landscape Foundation ホームページ